



特別賞／審査員奨励賞

「国立ポリショイサーカスへの招待」

神奈川県遊技場協同組合／神奈川県福祉事業協会

46ページでも紹介したが、神奈川県遊技場協同組合の社会貢献活動は2005年に「20周年20億円」を達成した。国立ポリショイサーカスへの招待は、その活動のうちの大きな柱となる活動だ。

20年間の継続で 関係団体との絆が深まる

神奈川県新聞厚生文化事業団の主催事業への協賛がきっかけで、ポリショイサーカスへの招待は始まった。ポリショイサーカスはロシア連邦文化省に所属する国立の機関で、正式名称はロシア連邦サーカス公団。6,600頭の動物、約8,000人のアーティストとスタッフ、さらに約100カ所の常設・仮設の劇場を持つ世界最大のサーカス団で、現在世界各国で公演を行っている。日本ではロシア語で「偉大なサーカス」を意味する「ポリショイサーカス」という呼び名が一般的だ。昭和33年（1958年）の初

来日以来、40年以上継続して全国公演し、サーカスの代名詞ともいえるほど。馬や象、熊など動物たちの曲芸や空中ブランコに空中アクロバット……手に汗をにぎり、気持ちの和む、優れたアーティストたちによるレベルの高い公演内容は、子どもたちの憧れでもある。

このポリショイサーカス横浜公演への招待事業は、協会設立当初から行われており、毎年7～8月の4～5日間に、約1,500名ほど招待しており、20年間の総数は約4万2,000人に上る。事業総額は1億9,000万円に。

夏場の暑い時期のこと。子どもも引率の先生方も汗をかきながらの観賞だが「ありがとうございました」と、スタッフに礼を述べて帰っていくという。子どもたちのみならず、忙しい先生たちにとっても一服の清涼剤の役割を果たしている。

招待される子どもたちは、県内の児童養護施設を中心に、母子支援施設・児童相談所等から、希望者を募り、配布先の状況を確認したうえで、公平性を保ちつつチケットを配布する作業を県のボランティアセンターへ依頼している。



招待された子どもたち
20年間で約4万2,000人を招待してきた。



象の曲芸は子どもたちに人気。大歓声に団員も力が入る。



20年間で約4万2,000人の子どもたちに 夢と希望、元気を与える



サーカスの日は ひと夏の貴重な思い出

20年間のエピソードも実に多い。真夏の炎天下で子どもたちは、入場時間まで外できちんと並んで待っているが、急な落雷があった時に、怯えながらも必死になって駆けしてきた子どももいた。子どもたちにとってはそれだけ楽しみなイベントなのである。また観た後、熊の演技があまりに素晴らしいので、人間が入っているのではないかと休憩時間にこわごわ近寄っては「本物だった」と驚いていた子ども後をたたない。こうした体験は、ひと夏の貴重な思い出として、成長後も長く胸に深く刻まれるはずである。

子どもたちからの 絵や手紙が大きな励みに

招待児童には組合・事業協会名でのおみやげが手渡される。



毎年1,500名程の子どもを招待している。福祉自主事業の中核事業のひとつ。

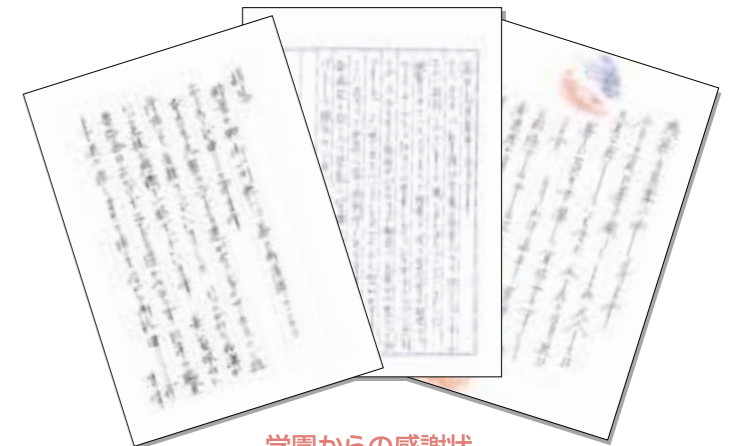


招待児童にはお菓子や双眼鏡、時計、防犯ブザーなどが入ったおみやげが配られる。

入り口で「なんだろう」「一人ずつもらえるんだね」などなど、喜びの声を挙げる。ただ非常に喜びながらも、袋を開ける子は一人もおらず、大切に持って帰るといふ。引きずるようにしながらもおみやげを抱えている姿は微笑ましく、関係者は毎年胸を熱くする。

同協会会長の荻原多聞氏は「子どもたちからたくさん贈られる、絵や手紙が何よりの評価です」と言う。また、ポリショイサーカスからも感謝状が贈られた。

毎年夏が近づくと、各施設やボランティアセンターから「今年もサーカスはありますか」と問い合わせがくる。それだけ、この招待事業は、広く深く浸透しているといえるのだ。



学園からの感謝状



国立ポリショイサーカスからの感謝状



おみやげを抱えて帰る子どもたち。その姿に関係者は胸が熱くなるという。



Pick up! **サーカスは、絆を深める大切なイベント**
児童養護施設 幸保愛児園 金子エスター聖美 園長

サーカスの日が近づくと、子どもたちは数日前からワクワク。当日は会長さんたちが入り口で汗びしょりになって迎えてくださり、子どもたちも元気に挨拶しています。

サーカスの公演はひとつひとつが迫力と感動そのもの。その感動が刺激となって、子どもたちにもやる気を起こさせるようです。戻ってから、空中ブランコの真似をしたり、サーカスの絵を描いたり、サーカスの話でもちきり。学校が始まると友達にも誇らしげに話しているようです。

自立した後、園に遊びに来た子たちとサーカスの話を

することもあり、皆で暮らしていたことへの感謝の気持ちを再確認するイベントともいえます。また、自分の子どもを連れて訪れた卒園生に、チケットを譲ったことも。2代にわたって共通体験ができるのも、継続して事業を行っていただいているからこそです。

複雑化する社会の中で、養護の必要な子どもたちに手を差し伸べるのが私たちの仕事ですが、園では血のつながりはなくても、子どもたちは一つ屋根の下で暮らす家族。サーカスは、その絆を深める大切な機会として、なくてはならないものになっています。



審査員奨励賞

—選考理由—



社会貢献活動審査委員会 委員 脇田 直枝氏

本年度だけで1,500人、延べ4万2,000人もの子どもたちに夢見る時間をプレゼントし続けてきたこの事業に敬意を捧げます。協会に寄せられた絵や手紙に、どんなにサーカスに招かれたことが嬉しかったか、その節々に痛いほどあふれているのです。

成長期には喜びや感動の数が多いほど情操豊かな人間に育つもので、その意味では、この事業は単にイベントに招待というよりは、人間教育をしているといいと思います。ポリショイに胸躍らせたそのことは、彼らの心に一生残っていくでしょうし、心の栄養源となっていくはずですよ。

少子化の心配の前に、今そこにいる寂しい子たちを抱きしめてあげようという実践と受け取りました。